

民俗学における「生活世界」概念の「当たり前」についての再考

H U Xiaohui
戸 晓輝

中国社会科学院

(訳：西村真志葉)

今回のシンポジウムのテーマは「“当たり前”を問う！一日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界―」だが、これに対して、筆者は民俗学者が理解する「生活世界」という概念シヨンホオオシージエの「当たり前」を問いたいと考える。つまり、私たち民俗学者が研究ツールとする「生活世界」概念の前提、あるいは概念に先立つ理解の問題への再考である。

まずはドイツ語圏民俗学が「生活世界」概念を理解し、受容した際の得失を見てみよう。

100年余りの間、民俗学は民衆の生活に関するディシプリンだと考えられていた。これに関しては、ドイツ民俗学を「学問としてのフォルクスタンデ」と方向づけたヴィルヘルム・ハインリヒ・リールや、スイス民俗学の先駆者リヒャルト・ヴァイスといった研究者も言及している [Gerndt 2002:192]¹。しかし、きわめて長期に渡り、民俗学がその中心的課題として注目したのは民俗事象であり、民俗生活ではなかった。1960年代初頭、ナチスに利用された歴史を清算し、「民俗学」にまつわるイデオロギー色を払拭するため、ドイツ民俗学のテュービンゲン学派はヘルマン・パウジンガーの『科学技術世界のなかの民俗文化』[鮑辛格 2014]に代表されるような日常生活研究へと転向した。こうした方向転換は民俗学と民間文化研究を現前の生活世界へ、さらに歴史性と歴史へ解き放とうとする試みだった [Hengartner 1999:133]。「生活世界」という哲学概念は、ドイツ民俗学が日常生活研究へ転向する際に重要な啓発と影響をもたらしたと言ってよい。かつて、パウジンガー自身から、彼の「生活世界」概念はエトムント・フッサーとアルフレッド・シュッツから学んだもので、「生活世界とは環境においてあなた自身が創造するその部分だ」と聞いたことがある [戸 2010b]。だが惜しむらくは、ドイツ民俗学が「生活世界」概念を受容し、理解する際、その哲学的意味や、科学主義と実証主義に対する批判的機能を無視してしまった、ということである。しかもあまりに安易に「生活世界」と「日常世界」を同一視し、あるいはすげ替えてしまった。この点について、テュービンゲン学派の「日常生活」(Alltag)概念はシュッツらの知識社会学的意義における(つまり主体間で常識を共有する)経験的なレベルを指すのではなく、フランスのマルクス主義者アンリ・ルフェーヴルの理論に基づき、平坦で味気ない日常生活を指しているのであり、その核となるのは歴史の客観的構造ではなく、個人の日常生活に対する主観的感覚とミクロ体験だ、と指摘する者さえいる [Szymanska 2008:80]。そして1980年代に入ると、ドイツ民俗学は地域文化の社会史 (Sozialgeschichte regionaler Kultur) あるいは社会変容に関する経験的文化研究 (empirische Kulturforschung des sozialen Wandels) と理解されるようになっていく [Brückner1987:125]²。

21世紀以降、ドイツ語圏の民俗学は次々にヨーロッパ民族学や経験文化学と名称変更し、複数の名を持つディシプリン (Vielnamenfach) へと変貌を遂げた [Bendix 2012:364]。経

験文化学としてのヨーロッパ民俗学は、具体的な生活関係における主体の日常実践形式に注目し、ミクロな研究を提唱する傾向がある [Schmidt-Lauber 2004]。これについて、ドイツ語圏の学者はほぼ一致した理解に基づいて似通った描写を行っている。たとえばヘルゲ・ゲルントは、民俗学が方法論を生み出す能力はそのディシプリンの歴史、つまり文化比較、コンテクスト化、そして生活世界への回帰から生まれると指摘する。民俗学は日常の生活世界をテーマにし、地域と文化空間の関係域において生活世界を描くが、その日常の生活世界とは文化的意味を担うもの、すなわち歴史と社会に認められた意味構成物だと理解しているのである [Gerndt 2002:240,245,263]。マルティン・ヨナスは、「民俗学的文化学は、生活世界のさまざまな局面において生活世界を描写し、分析しようと試みる」と述べている [Jonas 2009:16]。また、民俗学の「生活世界」という概念範囲はさまざまな地平に触れ、これらの地平は自然的・時間的・社会的視野から異なる構造領域と機能領域に限定したり区分したりできる、と考える者もいる [Wiegelmann 1977:231]。

日常生活と生活世界を同一視する見方が、民俗学の研究領域拡大につながったことは間違いない。それに誰しもフッサールの意味における「生活世界」概念を選択しない、という自由を有しているだろう。だがそれでも私は問わずにはいられない。こうした自由が民俗学にもたらした損失はいかほどのものだろうか。民俗学者が「日常生活」をもって「生活世界」に換えるというやり方の「当たり前」を再考する必要はないのだろうか。

事実、リューディガー・ウェルターが警鐘を鳴らすように、フッサールの超越論的自我及びその世界の現象学は、第一のエポケーにおいて、すでに日常社会学が対象とするすべてを排除している。もしも社会学が「生活世界」という学術用語を受容しながら、超越論的自我とその世界ではなく、自然的態度における自我とその世界について世俗的描写を加えるならば、フッサールの概念はまったく異なる興味領域に持ち込まれるわけだから、こうしたやり口についてより詳細な弁明がなされるべきだろう [Welter 1986:185]。ドイツ語圏の多くの民俗学者たちがシュッツ社会学の観点を全面的に肯定し、民俗学の社会学化あるいは社会科学化に関与した以上 [Kaschuba 2006:93]、彼らも同様に理論的な説明責任を免れえない。シュッツ自身は、社会学が研究するのは主観性や間主観性の哲学的側面ではなく、人間が自然的態度のなかで体験する生活世界の構造であり、また経験社会学の真の基礎は自然的態度の構成的現象学であって、超越論的現象学ではない、と明言している [Schutz 1959]³。彼の観点は、事実上フッサールから背離している。なぜなら、フッサールにとって、世界はそもそも超越論的現象であり、生活世界は人間が直接経験する世界ではあるが、その自然的態度をエポケーしないかぎり立ち現れることはなく、よって研究テーマと見なされることもないからである⁴。フッサールは、世界の課題化には、直接客観的にテーマとする客観的科学の方法と、主観的な方法あるいは主観によって与えられる形式においてテーマとする精神科学の方法があると考えた。つまり、「現在私は超越論的還元を逆にした。現在誕生した精神科学は、これに先行する世界を持たず、この世界をつねに堅持するのでもない」わけである。そしてこのときの「主観的に」とは、「主観自身を課題とすることで、客観的な自然を問わない」ということを意味する。あるいは「現在この種の方法をもって我々が課題とするのは決して世界ではない。それは変容する所与の形式をもって絶え間なく事前に与えられる世界にすぎない」とも言えよう [Husserl 1954:157, 305]。フッサールにとって、この新しい精神科学が主観によって賦与される世界を課題とす

るということは、自由かつ歴史的な人間を課題とするということに等しい。なぜなら主観によって賦与される世界はつねに人間の世界であり、その人間も世界の外にある人間ではなく、世界において人格と人格的態度（die personale Einstellung）を有する人間を意味するからである [Husserl 1954: 302]。もちろん、人格といっても人間の性格や精神的素養を指すのではない。それは、人間が個人として備えている奪われることなき精神的存在のことであり、人間が権利を有し、義務を負う道徳と自由の能力を指す。ハイリンヒ・ブリンクマンが指摘するように、客観的な自然科学は自由を発見することはできず、精神科学与自然科学はそれぞれ異なる対象領域に向かい、異なる人間観（Auffassungen vom Menschen）に触れることになる。具体的に言えば、精神科学に触れる人間は道徳的存在者であり、責任能力と自由能力を有している。その研究は人間のこの二つの能力を考慮し、理解しなければならないのである [Brinkmann 1993: 151-153]。もしも民俗学が客観科学の方法で生活世界を直接課題化するならば、あるいは自然態度における日常生活のみ研究するならば、責任と自由の能力を持つ人間を描くことはできない。「性質世界には具体的な主体性（個人が存在する自由の意味）が占める位置はなく、原始的な生活世界こそが主体性の絶対的な策源地」だからである [呂 2006]。これは民俗学がフッサールの「生活世界」概念を放棄した後に直面せざるを得ない危険性、そして最大の損失だろう。2008年の論文でも、筆者は次のように指摘した。

近年「生活世界」概念が使用される機会が増えたが、ほとんどの民俗学者は「生活世界」を我々の周囲に直接存在する、あるいは我々がそこで生活を営む客観的な日常生活世界だと理解している。言葉を変えれば、口承伝統研究や民俗学の分野では、「生活世界」は「日常生活」の同義語に過ぎないのだ。これはフッサールの「生活世界」概念への誤解を孕んでいるだけでなく、この概念が現代の民間文学研究や民俗学研究にもたらすかもしれない重要な革新的作用を覆い隠す行為であり、再び議論されてしかるべきである [戸 2008]。

フッサールの「生活世界」概念を巡る諸問題とこの概念が民俗学にもたらす価値および意義については、拙書『愛と自由の生活世界への回帰：純粋民間文学のキーワードに関する哲学的解釈』において、集中的な検証を行った。本稿でこの概念に対する民俗学者の理解の「当たり前」を再び問うのは、「当然視されるものはまさしく生活世界の哲学が提示しようとするものであり、それを所与としての既成の存在と見なせば、真に根源的な問題を飛び越えてしまい、生活世界を認識する可能性を失ってしまう」 [張 2004:51] からである。

その危険性を指摘するためにも、本稿では以下の点を補足、説明したい。

(1) 客観科学はその理論的活動がそもそも生活世界の直接性にに基づいていることを忘却している、と指摘するフッサールにとって、「生活世界への回帰」というキャッチコピーは、「客観主義的態度をエポケーしよう」という意味になる。もしも民俗学が、客観主義的態度をエポケーしないまま、「生活世界」という空っぽの名前を使用するならば、「生活世界」概念は民俗学の日常生活研究において、名実相伴わないことになり、民俗学は客観的な実証科学の慣例から逃れえず、回帰そのものがますます難しくなる。民俗が生活世界における特定の実践的行為だと認める以上、実証科学の方式で民俗の実践を研究することはできない。なぜなら実証科学の方式は、実践する主体の人格や精神、責任・自由の能力への軽視や隠蔽を招くだけだからである。

(2) フッサールの「生活世界」は共同的な意味の基盤であり、多重的類型を有している。つまり普遍的・先験的生活世界と具体的・実際的生活世界であり、前者が恒常的かつ形式的であるのに対し、後者は内容的で相対的に変化するものである [Hohl 1962:32]⁵。あるいはフーバート・ホルの区分に倣えば、人間の精神的・歴史的・共同的生活には、直接経験される日常生活と、内省される生活（たとえば科学的な生活）、さらに絶対的生活（絶対的内省を通じてのみ到達され、自らの志向により絶対的にその周辺世界を創造する生活）があるといえよう [Hohl 1962: 49]。ここで最後に区分された生活を研究するのは、明らかに民俗学ではなく、現象学の使命である。しかし、フッサールにとって、この三つの生活は統一され、一体化されてもいる⁶。つまり、それぞれに異なる経験的自我はすべて、同一の先験的自我を内包しているのである。もしも民俗学が上記第1項に分類される生活のみに注目し、第3項の生活を軽んじれば、相対化、差異化、地方化、民族化、断片化された文化の表層に足を捕らわれ、ディシプリンとしての統一性を失い、単純な個別ケースの積み重ねになってしまうだろう。だが逆に、普遍的・先験的な生活世界の地平を保てば、民俗学自身の統一性と一貫性を回復し、そこから民俗学の実践理性の原点に立ち戻り、「性質（経験）世界に先立つ意味（先験）世界すわなち『生活世界』というプレ概念の『事柄』自身に返る」[呂 2006] のを手助けしてくれるだろう。ここから、民俗学研究の実践原則は、第3項の生活（先験的自我）を起点にし、第1項の生活（経験的自我）を見ることであり、第1項の生活に身を浸し、さまざまな機能的推論や描写を行うことではない、と言えよう。

(3) フッサールは、普遍的な生活世界の先験性は普遍的で論理に先立つ先験性であり、これは客観／論理的な先験性とは異なるため、両者を原則上区別することがきわめて重要だと指摘している [Husserl 1954:144]。ゲルト・ブランドは、現象学の先験性はあらゆる経験の形式を最初から決定づけているが、こうした形式は質料的・具体的先験性であり、経験そのものに内在しているために、独立した類型の経験として体験される先験性だと解説している。現象学の視点から見れば、意識は常に「……に対する」意識であり、「私」はつねに世界において世界の生活や生命を経験するのである [Brand 1971:51-52]。つまり、アプリオリな意味において、超越論的自我は世界と対立する両極として位置づけられるのではなく、世界における先験的生活そのものなのである。現象学が述べる場所の先験性とは、経験される時間に先立つのではなく、経験の条件に先立つものである。そして生活世界は個人が事実として経験する対象ではなく、先験意識の「対象」である。これは人間に対して有効な世界ではあるが、人間の主観的心理に対して有効な、偶然的経験世界ではない。それは、偶然的な経験世界の一般構造と普遍の本質であり、変容における不変である [高 2004:145]。フッサールの助手ルードヴィヒ・ランドグレーベもまた、生活世界哲学のテーマはフッサールが言うところの「形式的・普遍的なもの、つまり生活世界のあらゆる相対的変化において不変を保つもの」と述べている [Husserl 1954:145]。これは異なる生活世界のすべての経験的研究に相対する場所の先験性であり、異なる具体的な生活世界を比較し、区別する可能条件である。よって、哲学以外のディシプリンも、この意義における超越論的原则をもって、異なる生活世界に分析、描写、比較を行う必要があるということになる [Landgrebe 1977:29-30]。これは生活世界の意識と自然的態度のなかの意識が、絶対的意識によって担われていることを意味している。現象学的還元は私たちに生活世界の構成原理（絶対的意識／絶対的主観性）へ通じる道を切り開いてくれ

た。生活世界の生成はこうした絶対的主観性の「自己客観化（Selbstobjektivierung）」である。フッサールの「生活世界」概念は社会学の「日常生活」概念の前身ではなく、その「日常生活」概念を審査する機関（Instanz）なのである [Sommer 1980:35-37]。さらに言えば、絶対意識もまた、超越論的自我（das transzendente Ich）に由来する。もしも民俗学が生活世界の構成原理つまり絶対意識へ至る道を諦めるならば、これは日常生活研究の尺度と基準を手放すことに等しく、文化相主義の泥沼に陥りかねない結果を招くだろう。

(4) 生活世界の「構成」は、意識にもたらされた存在の表出というだけではなく、意識の設定が実を結ぶことで行われる創世（Weltschöpfung）あるいは存在の創造（Schöpfung des Seins）である。こうした意識は、絶対的意識あるいは超越論的自我であり、超越論的自我は倫理的自我、つまり責任能力と自由能力を有する自我である [Landgrebe 1963:147, 196]。そして、この「私」はフィヒテがいうところの「経験的世界を成立せしめる根源的活動（事行／Tathandlung）」をする自我であり、純粹実践的な自我である。これは、生活世界の「構成」はたんなる認識というわけではなく、根源的な実践行為だということを意味している。「私」が「私」の世界経験と創造に対して責任を負う、というときの「私」は人格的な「私」であり、すべての人の人格的自我は平等である。「生活世界」概念の導入が民俗学にもたらす最大の意義が、ここにある。「生活世界」の先験性が民俗実践の先験性を表出し、私たちにさまざまな民俗的現象のうちから経験的自我を見せてくれると同時に、超越論的自我の人格性と自由に実践する能力を忘れてはいけないと教えてくれるのだ。もしも民俗学がこうした超越論的自我を生活世界の中から排除してしまえば、生活世界の統一的構造と形式特徴を語るすべを失い、複数の意義において相対的な生活世界の内容を残すばかりとなる。しかも民俗学が研究する人間は、自由の能力と平等な人格を持つ人間ではなくなってしまう。そうして描かれる生活世界も愛と自由に満ちた世界となることはありえない。

(5) 「生活世界」概念の導入は民俗学を現下の日常生活へ導くだけではなく、かつての実証民俗学を実践民俗学へ転向することを要求する。民俗学の生活世界は民俗事象に構成される静止した世界ではない。それは民俗の実践的創造により構築される動的世界、つまり民俗実践の世界なのである。実際、生活世界の民俗実践においては、「文化」という概念がすでに大きな広がりを見せており、狭義の習俗と伝統から、あるいは教育と特権的な意味における精髓から、人々が特定規則に準拠して行う広義の思惟・解釈・行動活動の実践となった。そして、文化が人々の特定規則に準じた実践というだけでなく、文化学としての民俗学もまた、特定規則に準じた実践なのである。生活世界の民俗学は本来、実践民俗学であってしかるべきである。

(6) 日常生活が生活世界を表出する一つの特定形式だといっても、この日常生活にも忘却されるものがある。ここで述べる忘却とは、何か物事を忘れるということではなく、生活世界に対する日常生活の忘却であり、だからこそ日常生活の自己啓蒙が必要となるのである [Waldenfels 1989:107]。だが、民俗学の第一の責務は、日常生活の記憶内容と忘れられた内容を拾い集めて補充することではない。それは日常生活の生活世界に対する忘却を克服すること、少なくともこうした忘却に対して警鐘を鳴らすことである。

この点について、拙文「民俗と生活世界」では次のように述べた。

民間文学あるいは民俗学の「生活世界」は人間の「超越論的（先験的）自我」が構築する

結果である。それは実証科学の経験に先立つ世界であって、認識、実証主義科学にとっては理解と把握が難しい世界である。

民間文学・民俗学の「生活世界」は直接的に経験される、あるいは直観される世界である。だがその構造と特徴について洞察を加えるには、現象学的還元、つまり客観主義の世界観と客観科学の方法論をエポケーしなければならぬ。これは、「生活世界」概念を導入するということ、たんに民間文学や民俗学のすでにある「地盤」や研究領域を「拡大」するためという次元の話ではなく、このディシプリンのかつての客観主義的世界観と客観科学的方法論をすべて改変し、また過去のいわゆる「客観的」研究対象（それが神話、民謡、叙事詩あるいは物質文化だろうと）をすべて主観的な生活世界へ還元することを意味する。生活世界は口承伝統あるいは民俗学の「世界」のうちの一つではない、それはあくまで民間文学・民俗学が研究する唯一の「世界」なのだ [戸 2008]。

生活世界は民俗学の出発点であり、民俗学が帰るべき場所だといえよう。生活世界から出発するということは、ドイツロマン派が民俗学に賦与した内在的目的と実践の意志から——つまり自由意志から——出発し、人間の本性（人格）と物事の特異性（*Eigentümlichkeit*）を尊重するということである。これは人間と物事そのものを目的とし、異なる民族、文化、および個人を尊重し、これらが差異（*Ungleichheit*）を保持する同等（*gleich*）の権利を守るということである [Zimmermann 2001:502]。人間が構築する具体的な生活世界は異なるが、生活世界の統一的構造と先験的形式に含まれる超越論的自我は同一であり、平等である。民俗学とその他のディシプリンの根本的な違いは、民俗学がさまざまな具体的生活世界を帰納的に推論するのではない、という点にある。民俗学は、生活世界のアプリアリな立場からあるいは超越論的自我から出発し、自由意志を持って人間と研究「対象」を有機体と見なす。つまり人間を手段とすると同時に目的とするわけだが、これは決して帰納的推論ではなく、（研究と認識の）無目的の（物事そのものとの）合目的である。この意味において、民俗学は生活世界と深いつながりを持つといえるだろう。フッサールにとっては、生活世界は主観相対的なものではあるが、それでも超越論的な統一的構造と無目的・合目的性を有している。フッサールは生活世界が一切の目的に先行する所与の審美的特質⁷を有しており、これが「目的構造物」ではなく「構造物」だと強調したが、他方では、生活世界は主体が「想像し志向する関心／目的の興味生活」かもしれないとも述べた。もしも現在なお多くの学者がしているように、シュッツを追従し、まず「生活世界」概念がフッサールのもとで放っていた超越論のカラーを掻き消したうえで、この概念を民俗学へ導入しようとするのは、「生活世界」概念を導入することの根本的価値と意義をほとんど失うに等しい [戸 2010a:291-292, 312, 326-330]。もちろん民俗学は現象学と同義ではないし、世界そのものを研究することはできない⁸。しかし生活世界の超越論的地平を保つことは、ドイツロマン主義が民俗学に賦与した古典的理想と自由意思へ立ち戻る一つの重要な道筋である。「生活世界を安易に日常世界あるいは研究対象の同義語と見なすような乱暴な真似を避ける」ためには、「『生活世界』は民俗学の研究対象ではなく、民俗学研究の足元を支える場所であるべき」ことや、「『生活世界』が民俗学を含むすべての人文社会学の『研究』に新しいページを開いた」こと、そして「民俗学とその『研究』の潜在的な貢献が、人間の生活、生命および自由の存在に対してきわめて大きな関心を寄せ、これを探求することにある」とい

うことを理解しなければならない。「この方面において、民俗学と肩を並べることのできるディシプリンはなく、これこそが民俗学の存続を正当化する鍵となるだろう」[邵 2012]。

以上で述べたとおり、生活世界のアプリオリな立場から着手しようとするれば、まず理論民俗学を実践民俗学へ転換することが求められる。「生活世界」概念が民俗学にもたらすのは、研究領域や研究「対象」の統一性だけではない⁹。より重要かつ根本的なのは統一された実践規則がもたらされること、つまり実践民俗学に最低の倫理と実践の規律が賦与されることである。フッサールの「生活世界」概念により民俗学を自らの実践的理性の起点に立ち返らせ、実践民俗学を再建することによってのみ、この細分化され、ケース研究化し、実証科学化し、その結果多くのディシプリンの狭間で自分を見失った民俗学をその根源から救うことができるだろう。

最後に、私は東アジアの民俗学者に次のような警鐘を鳴らしたい。「生活世界」という哲学概念を民俗学に導入する際、ドイツ語圏の多くの民俗学者のように、この概念から出発しているながら遠くへ行きすぎて、なぜこの概念から出発することになったのかを忘れてはいけぬ。

注

- 1 ドイツ語圏のその他の学者による関連発言については、拙書 [戸 2010a:15-17] を参照されたい。
- 2 この点については、^{フツェン}王傑文も「戦後活躍したヘルマン・パウジンガーやヴォルフガング・カシューバのような民俗学者にとって、『生活世界』は哲学的な意味を有していない。個人的には、彼らが言う『生活世界』は中国人が理解するところの現象レベルの『現下の日常生活』にすぎない」と述べている [王 2013]。
- 3 シュッツの観点は一貫していないが、少なくとも彼は「生活世界の意味を理解する道は、超越論的現象学の道である。だからこそ、後者はあらゆる文化科学と社会科学の基礎を独自に創造できたのだ。これらの科学研究の現象はすべて、私たちのこの生活世界の現象である」と考えていた [Schutz 1996: 107]。シュッツとフッサールの「生活世界」概念については、^{ヴェルツ}フランク・ヴェルツが比較と分析を行っているので参照されたい [Welz 1996]。
- 4 だからこそ、シュッツも自然的態度をエポケーせねばならなかった。この点については^{ヘーゲル}ヘーゲルの論述を参照されたい。「先験的還元の方法で日常生活を研究したフッサールとは大きく異なり、彼(シュッツ——引用者注)は『自然的態度のエポケー』という概念を創造し、説明した。この種のエポケーとフッサールが言うところの現象学的エポケーは異なる。それは理論的研究活動における社会学者が行うエポケーではなく、生活世界における正常な人間が正常な生活を営む際に行うエポケーである。そしてそれは懐疑的態度で行うエポケーではなく、日常生活の現象を当たり前と見なす普通の人間が、当たりの態度で行うエポケーである。」「彼(シュッツ——引用者注)は、生活世界で行動する者が、自然的態度を堅持しながら、彼の自然的態度を打破しなければならない、と指摘した。生活世界自体に超越性と能動性というベクトルが存在しているためである。」「生活を営む現代人にとって、当たり前と思われる世界のうち、所与の構成部分は不十分だ、とシュッツは明確に指摘した。それは開放された世界であり、自然的態度に頼るばかりでは足りないのである。」「シュッツは日常生活世界の意味構造を描写し、提示することで、人間が自然な日常的存在状態を超越し、自由で、創造的な個的存在になることを願った」[何 2010]。
- 5 経験の上からいっても、現代に生きるより多くの同年代の人間も、異なる民族の生活世界がただ一つしかない「人類文化」の変容体だと感じられるようになっていだろう。この点についてはヘルゲ・ゲルントの前掲書を参照されたい [Gerndt 2002: 260]。
- 6 「フッサールは生活世界哲学へ通じる道の上で、生活に関する概念を借用した。この概念は彼が実際に『生活世界』という言葉で指すものをはるかに超えている。もしもフッサールが議論した弁証関係において、『生活世界』が確定された人類の経験的基盤の名称ならば、『生活』は彼にとってあらゆる可能的生活——生物学的意味における現実から文化生活、ひいては『先験的生活』のすべて——を意味していただろう」[奥爾徳 1994]。
- 7 「その実、カントの『判断力批判』の世界こそがもっとも通常かつオーセンティックな世界であり、まさしくフッサール

がいうところの『生活世界』、そしてハイデッガーがいうところの『存在』する世界なのである」[葉 1999: 171]。

- 8 1994年、高丙中はすでに次のような鋭い指摘をしている。「民俗学が追求するのは生活世界の問題だが、実際には総体的な生活世界を研究することはできない、あるいは生活世界を総体と見なして研究することはできない。」「私たちは世界のすべてを見ることはできない。そこで私たちは世界を想像し、思考し、語るのだが、これを研究することはできないのである。」「こうした認識に基づいて、筆者は民俗学の直接的な対象を民俗および民俗生活と定め、生活世界と生活文化を民俗学の領域と見なす」[高 1994: 145-146]。この点については拙書でも次のように述べた。「私たちが生活世界は研究できないというとき、一義的な意味における生活世界を指しているのは間違いない。このような生活世界はまさにアプリアリな、先験的な生活視野あるいは地平(Horizont)である。私たちが共有する視野あるいは地平としての生活世界は、所与のものだが、私たちによって課題化されることはなく、認識と研究の対象になることもない。(中略)民間文学や民俗は生活世界の視野・視界のなかで構築された現象である。具体的に賦与される経験の差異により、異なる生活世界の現象が創出されるので、私たちは複数の意義における生活世界の現象を語るができる。民間文学や民俗とはこのような生活世界の現象なのである」[戸 2010a: 367]。
- 9 「生活世界」という概念の導入が民俗学研究にもたらす意義について、高丙中は次のように指摘している。「『生活世界』という完全な概念を手にした民俗学は、その領域が再びバラバラに見えることもないだろう。かつてはこうした総体性を把握するに至らなかったため、その時々において文芸や呪術、物質生活、習慣法などを研究する民俗学が、まとまりのないごちゃ混ぜだと思われても仕方がなかった。だが現在、これらの研究対象は密接に関係しているだけでなく、共に完全な生活世界を構成すると考えられるようになったのである」[高 1994: 138]。

参考文献

- 奥爾特、E.W. 1994 「『生活世界』是不可避免的幻想——胡塞爾的『生活世界』概念及其文化政治困境」鄧曉芒訳『哲学訳義』第5期
- 鮑辛格 2014 『技術世界中的民間文化』戸曉輝訳 広西師範大学出版社
- BENDIX, R. F. 2012 From Volkskunde to the “Field of Many Names” : Folklore Studies in German-Speaking Europe Since 1945, in Regina F. Bendix and Galit Hasan-Rokem (ed.), *A Companion to Folklore*, Wiley-Blackwell
- BRAND, G. 1971 *Die Lebenswelt: Eine Philosophie des konkreten Apriori*, Walter de Gruyter
- BRINKMANN, H. 1993 *Lebenswelt und Wissenschaft: Vorträge und Aufsätze*, Pflungstadt bei Darmstadt
- BRÜCKNER, W. 1987 Geschichte der Volkskunde. Versuch einer Annäherung für Franzosen, in Isaac Chiva, Utz Jeggle (Hg.), *Deutsche Volkskunde-Französische Ethnologie: Zwei Standortbestimmungen*, Campus Verlag GmbH, Frankfurt/Main
- 高丙中 1994 『民俗文化与民俗生活』中国社会科学出版社
- 高秉江 2004 「胡塞爾『生活世界』的先験性」尹樹広、黄惠珍編『生活世界理論: 現象学・日常生活批判・実践哲学』黒龍江人民出版社
- GERNDT, H. 2002 *Kulturwissenschaft im Zeitalter der Globalisierung, Volkskundliche Markierungen*, Waxmann Verlag GmbH, Münster
- 何林 2010 「許茨的生活世界理論及其当代意義」『遼寧大学学报』第6期
- HENGARTNER, T. 1999 *Forschungsfeld Stadt. Zur Geschichte der volkskundlichen Erforschung städtischer Lebensformen*, Dietrich Reimer Verlag
- HOHL, H. 1962 *Lebenswelt und Geschichte: Grundzüge der Spätphilosophie E. Husserls*, Verlag Karl Alber Freiburg /München
- HUSSERL, E. 1954 *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine*

- Einleitung in die Phänomenologische Philosophie*, Martinus Nijhoff Haag
- 戸曉輝 2008「民俗與生活世界」『文化遺產』第1期
- 戸曉輝 2010a『返回愛與自由的生活世界：純粹民間文學關鍵詞的哲學闡釋』江蘇人民出版社
- 戸曉輝 2010b〔2006〕「德國民俗學者訪談錄」中國社會科學院文學研究所編『走向世界的中國文學研究』社會科學文獻出版社
- JONAS, M. 2009 Volkskundliche Kulturwissenschaft als “Grundwissenschaft” ? Nachtrag zur Studierendentagung 2007 in Wien, in Laura Hompesch, Martin Jonas, Judith Punz, Anna Stoffregen (Hg.), *Aus dem Tagungskoffer: Reflexionen einer Studierendentagung*, Verlag des Instituts für Europäische Ethnologie
- KASCHUBA, W. 2006 *Einführung in die Europäische Ethnologie*, Verlag C.H.Beck München
- LANDGREBE, L. 1963 *Der Weg der Phänomenologie. Das Problem einer ursprünglichen Erfahrung*, Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, Gütersloh
- LANDGREBE, L. 1977 Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins, in Bernhard Waldenfels, Jan M. Broekman und Ante Pažanin (Hg.), *Phänomenologie und Marxismus, Band 2: praktische Philosophie*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main
- 呂微 2006「民間文學—民俗學研究中的『性質世界』、『意義世界』與『生活世界』——重讀『歌謠』週刊的『兩個目的』」『民間文化論壇』第3期
- SCHMIDT-LAUBER, B. 2004 Europäische Ethnologie und Gemütlichkeit. Fragen einer Alltagskulturwissenschaft, in *Österreichische Zeitschrift für Geschichtswissenschaften*, 15. Jg., Heft 4
- SCHUTZ, A. 1959 Husserl's Importance for the Social Sciences, in Edmund Husserl, *1859-1959: Recueil Commémoratif publié à l'occasion du centenaire de la Naissance du Philosophe*, Martinus Nijhoff/ La Haye
- SCHUTZ, A. 1996 *Collected Papers*, IV, Edited by Helmut Wagner and George Psathas, Kluwer Academic Publishers
- 邵卉芳 2012「『生活世界』再認識」『民俗研究』第6期
- SOMMER, M. 1980 Der Alltagsbegriff in der Phänomenologie und seine gegenwärtige Rezeption in den Sozialwissenschaften, in Dieter Lenzen (Hrsg.), *Pädagogik und Alltag: Methoden und Ergebnisse alltagsorientierter Forschung in der Erziehungswissenschaft*, Verlagsgemeinschaft Ernst Klett
- SZYMANSKA, G. 2008 Zwischen Abschied und Wiederkehr: Die Volkskunde im Kulturremodell der Empirischer Kulturwissenschaft, in Tobias Schweiger und Jens Wietschorke (Hg.), *Standortbestimmungen. Beiträge zur Fachdebatte in der Europäischen Ethnologie*, Verlag des Instituts für Europäische Ethnologie
- WALDENFELS, B. 1989 Lebenswelt zwischen Alltäglichem und Unalltäglichem, in Christoph Jamme und Otto Pöggeler (Hg.), *Phänomenologie im Widerstreit: Zum 50. Todestag Edmund Husserls*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main
- 王傑文 2013「『生活世界』與『日常生活』——關於民俗學『元理論』的思考」『民俗研究』第4期
- WIEGELMANN, G. 1977 *Matthias Zender, Gerhard Heilfurth, Volkskunde: Eine Einführung*, Berlin: Erich Schmidt Verlag
- WELTER, R. 1986 *Der Begriff der Lebenswelt. Theorien vortheoretischer Erfahrungswelt*, Wilhelm Fink Verlag
- WELZ, F. 1996 *Kritik der Lebenswelt: eine soziologische Auseinandersetzung mit Edmund Husserl und Alfred Schütz*, Westdeutscher Verlag GmbH, Opladen
- 葉秀山 1999『葉秀山學術文化隨筆』中國青年出版社
- 張祥龍 2004「胡塞爾『生活世界』學說的含義與問題」尹樹宏、黃惠珍編『生活世界理論：現象學·日常生活批判·實踐哲學』黑龍江人民出版社
- Zimmermann, H. P. 2001 *Ästhetische Aufklärung. Zur Revision der Romantik in volkskundlicher Absicht*, Verlag Königshausen & Neumann GmbH, Würzburg